2月2日　　マタイによる福音書21章12～16節

「神殿のあるべき姿」

今日の箇所は、先週の箇所から少し飛んで、イエスさまが大歓迎の雰囲気の中エルサレムに入城した後の出来事です。イエス様はその後すぐに神殿に向かって、宮清めを行っています。

この出来事が起きた場所は、エルサレム神殿に入ってすぐの「異邦人の庭」だったようです。すべての人がこの庭を通って内側に行くため、広場のようになった場所では神様に捧げるためのいけにえの動物が売られていました。犠牲の動物は傷があってはいけないため、遠くから巡礼に来た人は動物を持ってくるのではなく、ここに来てから買っていたそうです。

イエス様は異邦人の庭に集まった人々を「全て」追いだしてしまっているのですが、神殿で行われていた商売は、神殿が認可した商売であり、これはローマ総督が承認した業務として認められていました。宮清めはそんな彼らに対する抗議となりますから、彼らの行いそのものもそうですが、神殿そのものに対する批判と、ローマ総督に対する反抗の意味も持った行動だったようです。イエス様の行動によって蜘蛛の子を散らすように、売り買いをしていた人々「全て」、つまり商売人も巡礼者も異邦人の庭から追い出されて行きました。

その後、宮清めを行った結果として「目の見えない人や足の不自由な人たちが寄って来た」という驚くべきことが起きています。体の不自由な人も病人も神殿内部に入ることが許されていませんでした。商売人と巡礼者であふれる庭にひとたび入り込むと、すぐに気付かれて追い出されてしまったことでしょう。しかし、宮清めの結果、異邦人の庭にはもはや誰もいません。突然に生まれた隙間へと、彼ら病人たちはイエス様の元まで進み、神殿の庭に入ることが出来るようになったのです。イエス様が行った宮清めは、腐敗した神殿を浄める業であったと同時に、本当に向けるべき愛を、向けるべき人に向けるために必要不可欠な業でした。神様が求めていたのはお金儲けではなく、自分自身の罪に執着しすぎることでもなく、小さくされた人、弱いままにされた人に愛の業を向けることでした。そのために行われた癒しの奇跡によって、多くの人が神様の愛を実感することになったのです。

私たちの心は、神様の言葉で満たされているでしょうか。それとも大きな隙間が空いていて、それを埋めるために必死になっているでしょうか。それとも、「自分の正しさ」という大きな塊によって埋まってしまい、他の人のことを受け入れる余地も、御言葉で満たすことも出来なくなってしまっているのでしょうか。そのように、私たちが自分の心を埋めてしまっているものを、私たちの「十字架」と呼ぶのです。私たちが日々礼拝に出て、聖書の言葉とイエス様の業を聞くことには、この十字架を一度おろしイエス様の十字架を共に背負って、本当に「正しいこと」を見つめ直す意味があるのです。そうして私たちは、また日常へと戻ったその時に、私たちが何を行えばいいのかを知ることが出来るようになるのです。

自分の都合によって心を満たして頑なになってしまうのではなく、神様の御心を叶えるために、イエス様によって用いられるために、その言葉を受け入れる隙間をいつも心掛けておきましょう。そうすれば、私たちはいつでも神様によって支えられた「本当の正しさ」を知ることが出来るのです。神様によって強められている喜びを胸に、今週一週間の歩みを、これからの歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：マタイによる福音書21章12～16節

- 12:それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いをしていた人々を皆追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを倒された。そして言われた。「こう書いてある。『わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである。』ところが、あなたたちは　それを強盗の巣にしている。」境内では目の見えない人や足の不自由な人たちがそばに寄って来たので、イエスはこれらの人々をいやされた。他方、祭司長たちや、律法学者たちは、イエスがなさった不思議な業を見、境内で子供たちまで叫んで、「ダビデの子にホサナ」と言うのを聞いて腹を立て、イエスに言った。「子供たちが何と言っているか、聞こえるか。」イエスは言われた。「聞こえる。あなたたちこそ、『幼子や乳飲み子の口に、あなたは賛美を歌わせた』という言葉をまだ読んだことがないのか。」